第7部（4）追及　調査に「限界」核心迫れず

「なぜ避難が遅れたのか、なぜ川に向かったのか。解き明かしてほしいことが結論になってしまった。1年間、何だったのか」

石巻市大川小で6年の長男大輔君＝当時（１２）＝を亡くした今野浩行さん（５６）が振り返る。

最終報告書の説明を受け、記者会見する遺族＝２０１４年2月２３日、石巻市の宮城県石巻合同庁舎

大川小事故検証委員会は発足から1年となる２０１４年2月、最終報告書を取りまとめた。当初の3倍近い事業費５７００万円をかけ、計9回の会合を経た約２００ページの報告書は「避難開始の意思決定が遅く、河川の堤防付近を避難先としたことが直接的な要因」と結論付けた。

「火事現場を調べて『原因は火』と言うようなもの」。6年の三男雄樹君＝同（１２）＝を亡くした佐藤和隆さん（５１）は納得できなかった。

検証に難しさはあった。あの日、校庭にいた人の多くは亡くなった。限られた目撃者も震災から2年がたち、記憶が薄れたり、欠けたりしている懸念があった。

それでも遺族の目に、検証委の言う「中立公正」「ゼロベース」は、津波襲来に至る５０分間の核心に踏み込まず、「仕方がなかった」証拠を集めているように映った。

遺族が矛盾を指摘する男性教務主任（５７）の証言が数多く採用され、児童らの危機感を表す証言は両論併記や推定にとどまった。地震後、指揮台のラジオを聴いていたとの複数の証言がありながら、備品台帳で存在の有無から調べた。津波の分析に時間を費やした。

校庭に避難してきた地域住民の発言が影響したとの見方に「子どもは地域に預けたのではない」と反発が起こった。市教委の事後対応への追及は、職員の「深く考えなかった」などの証言に妨げられ、十分に踏み込めなかった。

遺族が重要視したのは、教職員集団の人間関係、人事、組織の問題だった。防災に詳しい教務主任が裏山避難を強く主張できなかったのはなぜか。しかし、突っ込んだ議論はなかった。

検証委関係者は「検証委は県教委や文部科学省と一心同体に近く、その時点で限界があった。人事や組織の問題が背景にあると思っても、議論の俎上（そじょう）に載らなかった」と述懐する。

「疑問の全てに答えを見いだすことができたかと問われれば、十分にはできなかったと言わざるを得ない面がある」。報告書の最後に、検証の「限界」をにじませる一文が記載された。

委員長を務めた室崎益輝・兵庫県立大大学院減災復興政策研究科長は取材に「行政と遺族が対立し、信頼関係が築けなかった。市教委側の協力がほとんど得られず、検証委に強制力を伴う調査権がなかった」と振り返る。

１４年2月の最終報告書説明会後、石巻市内で記者会見した遺族７人は失望を隠せずにいた。一人息子だった3年の健太君＝同（９）＝を亡くした佐藤美広さん（５７）は「失うものは何もない。裁判に打って出たい」。今野さんは「子どもの敵を討つため、法的手段も検討したい」と語った。

不法行為に基づく損害賠償請求に関する3年の時効が半月後に迫っていた。

全校児童１０８人の大川小。地域社会のつながり、しがらみを抱えた父母たちが、行政を訴える決断は重い。

わが子を亡くした５４家族のうち１９家族が提訴した。